

沖縄戦 一生還した者の慰霊と語り―

1945(昭和 20)年 4 月にアメリカ軍が沖縄本島に上陸して始まった沖縄戦では、住民を巻き込む地上戦となり、日本とアメリカの軍人・民間人合わせて約 20 万人が犠牲となりました。今回は、日本兵として沖縄戦に従軍した和歌山県出身の内畑弘うちばたひろしが残した戦前・戦後の写真から、戦争から生還した者の慰霊と語りの活動についてみてきます。

1 資料

【資料 1】野戦重砲兵第 1 連隊

[* 資料のデジタル画像を見る](#)



【資料 2】楚辺収容所内の野球チームそへ



【資料 3】紀乃國之塔



(1) 沖縄戦に従軍した和歌山県出身者

1941(昭和 16)年からの太平洋戦争は、当初、日本が東南アジア・南太平洋の広大な地域を占領しましたが、アメリカの攻勢によって日本は次第に劣勢になりました。1945(昭和 20)年 4 月にアメリカ軍が沖縄本島に上陸、住民を巻き込む地上戦となり、学生を含む多くの人々が兵士や看護要員¹として動員されました。日本軍によって「集団自決」に追いこまれたり、スパイと疑われて殺害されたりした人も含めて沖縄の住民が約 9 万人、日本兵が約 9 万人、アメリカ兵が約 1 万人、亡くなりました。

沖縄戦には、和歌山県を含む各地から来た人々も関わりました。本資料の旧蔵者の内畑弘^{うちばたひろし}は 1923(大正 12)年和歌山市生まれ、1944(昭和 19)年に従軍し、沖縄へと配属されました。後年、内畑が著した下記の『紺碧のかなたに』^{こんぺき}には、沖縄戦の経験が語られています。内畑は、6 月 19 日にアメリカ軍の砲撃を受けて左足を負傷し、翌日意識不明のところをアメリカ軍に救出され、捕虜となりました。

内畑弘『紺碧のかなたに』 抜粋

鬱陶しい長雨の『梅雨』も終わりに近づく頃、ふと私は思い出すのである。忌まわしい悪夢のような人間ドラマを。それは、三十年余りも前の遠い昔のことである。しかし、私の脳裏には、つい昨日のように蘇ってくるのである。第二次世界大戦に参加し、最後の激戦地である沖縄決戦に、身の危険をさらしてきた私にとっては、余りにも強烈なドラマであり、生涯忘れることのできない傷痕は、今も癒されることなく、心の奥深くに閉ざされたままである。もちろん、多くの戦友達が、沖縄の地に散ったことを思えば、米軍の戦車砲を受け、負傷したと言いながら、こんにち生命のある私はほんとうに幸せ者と言わなければならないのだが……。 (中略)

当時は毎日のように雨が降り続いた。5 月 27 日頃南風原陸軍病院(沖縄陸軍病院)から撤退してきた軍医将校と、ひめゆり部隊の女子隊員、2、3 人がやってきて『米須に行く途中ですが、道路が暗いので一夜を泊めて下さい』と言った。暗い夜道は実に危険で、これまで夜道を歩き回ったことのある私には、十分その危険がわかっていたので、快く引き受け、洞窟の中へ案内した。しばらくして、その将校とお互いに出身地など話し合った。『私は、和歌山の山東(現・和歌山市)です。』と話しかけると、軍医将校も、同じ和歌山県の紀南の出身であると答えてくれた。わずかな時間であったが、故郷の山や川、青い海を思い出して、共に懐かしんだものだった。遠くで炸裂する砲弾の音を聞きながら、いつしか深い眠りに落ち込んでいた。そして夜明けと共に、軍医将校とひめゆり女子隊員は、洞窟をあとに米須へ出発して行ったが、彼らとは再び会うことがなかった。

(2) 本資料について

内畑弘氏旧蔵資料は、内畑が関わった沖縄戦に関する写真や新聞の切り抜き記録等です。

資料 1 は、内畑が所属した野戦重砲兵第 1 連隊の一部隊員を満洲で撮影した写真です。胸元の印は後年内畑が記したもので○が沖縄戦で戦死、△が沖縄戦で生存、×が満洲に残留とのことです。

資料 2 は、内畑が捕虜として収容された楚辺収容所^{そへ}(現・沖縄県読谷村^{よみたんそん})内で結成された野球チームの集合写真です(左下が内畑)。内畑は約 1 年間の収容所生活ののち、1946(昭和 21)年 10 月に和歌山市へと帰りました。

資料 3 は、沖縄戦で亡くなった和歌山県出身者 839 名を慰霊するために建立された紀乃國之塔(沖縄県糸満市米須)に内畑が訪れたときの写真です。戦後、内畑は何度も沖縄²へと訪れ、亡くなった人々への慰霊と自らの戦争体験を語る活動を続けていました。

¹ 沖縄師範学校女子部と沖縄県立第一高等女学校の生徒(15~19 歳)と教員で構成されたひめゆり学徒隊もその一つ。負傷兵の看護、食料の運搬、伝令、死体の埋葬などを行いました。5 月 25 日に沖縄陸軍病院(現・南風原町)から撤退命令が出ると、米須や伊原など沖縄本島南部へと逃げました。ひめゆり学徒隊の 240 名のうち、136 名が死亡しました。

² 戦後の沖縄は、1952(昭和 27)年に日本本土が独立した後も 1972(昭和 47)年に返還されるまでアメリカの施政下でした。沖縄が日本へ返還された後も沖縄のアメリカ軍基地の多くは存続し続けています。

3 活用のポイント

- **中学校社会〔歴史的分野〕の場合…C 近現代の日本と世界**

第二次世界大戦を学習する際に、身近な和歌山県出身の兵士として沖縄戦に従軍した内畑弘を取り上げ、「資料1の集合写真のうち沖縄戦で亡くなった方は何名でしょうか。」や「解説シートにある内畑の記述から、彼の戦争に対する思いを考察してみましょう。」などと問いかけることで、沖縄戦の悲惨さを知り、平和な社会の実現に努めることが大切であると気づくことができます。

- **歴史総合の場合…C 国際秩序の変化や大衆化と私たち**

第二次世界大戦を学習する際に、この解説シートのほか、解説シート「戦後日本とフィリピン―戦闘を続けた日本兵の捜索―」、「太平洋戦争の犠牲者―戦死した作曲家兼音楽教師の記録―」を合わせて、太平洋戦争に従軍した人に関する授業を構成することができます。この解説シートからは、「戦争から生還した内畑は、なぜ慰霊と語りの活動に力を入れたのでしょうか。」と問いかけることで、生還した者に残る精神的な傷や使命感を推測することができ、他の戦死した者と戦闘を続けた者の解説シートと合わせて、戦争が人々に与えた影響を考えることができます。

- **日本史探究の場合…D 近現代の地域・日本と世界**

第二次世界大戦を学習する際に、「沖縄戦から生還した内畑は、どのような活動に取り組んだのでしょうか。」と問いかけることで、沖縄へと何度も訪れて慰霊の活動をしたことと沖縄戦での自らの経験を記した書籍を発行するなど戦争の記憶の継承に取り組んだことに気付かせます。その上で、「なぜ内畑は、慰霊と記憶の継承の活動に熱心に取り組んだのでしょうか。」や「内畑の活動を知り、未来を生きる私たちは、どのようなことに取り組むべきでしょうか。」と問いかけ、慰霊と戦争の記憶の継承の意義について学び、いかにして平和な社会を実現することができるかを考えることができます。

4 出典

- ・当館所蔵 内畑弘氏旧蔵資料

5 関連資料・ウェブサイト等

- ・[「資料検索」\(沖縄県立公文書館\)](#)…戦中戦後の沖縄の写真や映像等の資料を閲覧できる。
- ・[「沖縄平和学習アーカイブ」\(沖縄県\)](#)
- ・[「沖縄県における戦災の状況\(沖縄県\)」\(総務省\)](#)
- ・[沖縄県平和祈念資料館](#)
- ・[ひめゆりの塔 ひめゆり平和祈念資料館](#)
- ・[「紀乃国之塔とは」\(和歌山県\)](#)

6 参考文献

- ・内畑弘『紺碧のかなたに―沖縄戦本島の記録―』内畑弘、2001年
- ・新城俊昭『教養講座 琉球・沖縄史』編集工房東洋企画、2014年
- ・ひめゆり平和祈念資料館編『ひめゆり平和祈念資料館ガイドブック 展示と証言』ひめゆり平和祈念資料館、2023年